

氏名	井上 航
学位の種類	博士(音楽学)
学位記番号	甲第20号
学位授与年月日	平成29年3月23日
論文題目	北東カンボジア山地民クルンの音響的参与の民族誌 —気分と精霊—
学位論文等審査委員	
	<論文審査>
	主 査 教授 山田 陽一
	副 査 教授 津崎 実
	外部審査員 寺田 吉孝
	(国立民族学博物館民族文化研究部教授)

論文要旨

第一章 視座と射程

カンボジア北東部の山地にくらすクルンの人々の民族誌的研究を始めるにあたり、中心的な視点となる「参与」および「気分」について大づかみに説明する。前者は、人が周囲の人々や出来事のなかに身をおき関与することを意味するが、それだけでなく、周囲とかかわりあう人が周囲の様態に影響されてものの感じ方などを変化させることにも言及するものである。後者は、身体的な動きや表情で漠然と表出されており、場に居合わせた人々のあいだで間主観的に感じられうるものである。これらを問題にするにいたった背景として、調査の初年度、サルパと呼ばれる伝統的な歌と踊りとゴング演奏の披露イベント、およびその直後の打ち上げの宴会に筆者が参加したときの経験がある。打ち上げの宴会では大勢の人がしたたかに酔っており、筆者自身はそこに溶け込みにくいと常に感じるが、それは現地では日常的にみられる様子だった。酔った人々にまじって筆者もゴング打奏に挑戦するチャンスを得たが、その時初めて打奏のリズムを体得でき、また、違和感が大きかった宴会の気分にくらか楽しさを感じることも出来た。披露イベントでも打ち上げでも同じ曲目が演奏されたが、打ち上げでは同じ曲目とは思えないほど迫力があり音の響き心地などが異なっていたことに興味をもった。クルンの人々の感性（ものを感じる）の一端にふれた思いだったが、それは周りの動きにどのように入り込んでいるかの「参与」の問題であり、そこで味わわれる「気分」の問題であることを強く実感した。

本研究は音響人類学的な研究である。それは民族音楽学と文化人類学の重なり合う領域に先行研究が蓄積されてきたもので、音楽的な経験、音にかかわる事象の経験を、文化的要因との関連で根本的に問うことを目指すものである。ものを感じるという広い意味での感性的な経験が問題になるため、経験されたことがどのような感じであるかという様態の記述がきわめて重要である。主観を抑制して客観的記述をめざすのではなく、人は互いに主観的なふだんの態度のままに意志や感覚の疎通があるという間主観性に立脚した記述方法を採用する。

第二章 生活環境と霊的なもの

章前半は、筆者が調査期間のほとんどを過ごしたカンチュン村とその周辺を念頭に、その生活世界について概観する。二、三百人の村落共同体の生活について、生業、親族形成、変化の著しい経済状況などをめぐる基本的な輪郭を描く。カンボジア北東部とラオス、ベトナムの隣接地域にまたがるより広域的な山地民の社会についても、人類学・地域研究・歴史学等の成果から俯瞰的に記述している。

章後半は、本研究全体でさまざまなかたちで話題にする霊的なものについて述べる。その種類だが、アラクは万物に宿るとされる精霊全般の呼称であり、ブラハは民俗信仰的なカミにおおむね相当する。カヨックは死霊、ブユーは生き霊、そのほか多種多様なものがある。原因不明の物音や不意に訪れる恐怖などは、霊的なものとの遭遇として捉えられる。霊的なものに遭遇したと語る人の体験談を2つ取り上げ、物音を言い表す擬音語などからその感じられ方・語られ方を分析する。何であるかわからない何かにおびやかされているように身体的に生々しく感じられることを霊的な作用だとする見方について、廣松渉が主張する「表情」の直截的感知という角度から理解を試みる。擬音語の多用は、物音などの表情的な様子を、それに共振する身体が取り込むという状況把握のありかたを示すと考えられる。周囲の状況との身体的なかかわりのなかで霊的なものをどう考えるかが重要だという、後続する章につながる基本的な視点を示す。

第三章 参与の問題系—ゴング打奏を中心として

霊的なものとの密接な関係がさぐられる牛／水牛供犠の際のゴング打奏（コブつきゴング 5 台の「タローム」等）について、「回り歩く」と「座りこむ」の打奏形態を記述する。打奏形態の違いは、人と人が、さらには人と霊的なものがともにあることの様態がどのように感じられるかという参与の問題を提起する。4 章、5 章にもまたがるかたちで、供犠のゴング打奏を事例に参与の問題に取り組むが、順を追って「参与」「感触」「気分」の概念とともに、ひとつながりの問題系として論じていく。「参与」については、民族音楽学者 C・カイルと S・フェルドにおける participation の語の用い方に示唆を得て、次のように考える。この語は「全体の一部をなす」「参加・関与する」を基本語義としながらも、何らかの性質・様態を「分かち合う」「帯びる」ことにも意味が及ぶ。周囲の状況に参加・関与しながら、その過程で何らかの様態を帯びるという意味にとりわけ注目し、「参与の様態」または「様態的参与」の表現で明確な論点化を図る。

参与の様態を問う際に突き当たるのが、何に参与しているか、何を帯びているかの「何」の位置づけ方である。たとえば、音楽に接している人が何らかのフィーリングを帯びているということも様態的参与の問題に属するが、「フィーリング」の中身を、客観的な空気振動（音）から受ける主観的な印象だと物心二元論的に整理してしまえば、個々の主観の問題となり沈黙せざるをえず、袋小路である。しかし、廣松の表情論にみられるような現象学的な思考にのっとり感覚・知覚を捉えなおせば、居合わせた人たちがそろってありありと感じるような何かが厳然とあることは明らかである。このようなものとして「感触」を規定し明確に論点化する（「感触」と「気分」がこれに当たるが後者はあとで問題にする）。感触が間主観的に共有されることについては、身体による知覚がそもそも周囲の人や事物の動きとの「共調 attunement」から成り立っているという説明を試みる。

第四章 ゴング打奏の感触

筆者が学んだ供犠のゴングの打奏パターン「タローム」を取り上げ、「共調」と「感触」のかかわりを具体的に記述する。打奏の感触として目指されているのは、クルン語で「ニウム」と表現される音色の心地よさである。およそ音楽演奏や鑑賞は他者とのあいだで感触が共有されることを前提に成立していると言える。むろんゴングの合奏もその例外ではない。演奏で望ましい身体の動きを探るなかで適切な感触に近づいていく共調の過程は、随意的に自覚されること以上に、気づいたらうまくいっているという経験に探るべきものがある。気づかないまま動いてしまう経験を記述するのは容易ではないが、メルロ＝ポンティら現象学者による経験の微視的な内省方法をヒントにしながらか書き進めていく。タロームの打奏における「間身体」的な共調の様態を描写する。その望ましい様態は、「楽しい」を意味する「ロク」というクルン語で表現される。

第五章 供犠のゴングと気分

音楽を例に言えば、演奏者が音色のよしあしを判断するなど、一点の微細な差異を感じ分けるような場合は「感触」が問題になるが、その同じ音に接する場合でも、場が勢いついているとか厳粛であるというような漠然と広がる「気分」をその音色に聴き取るような感じ方もある。関心によって、感じること・記述することの焦点が変わることをふまえ、「感触」と「気分」を区別する。本章では、ある村人が災いをなす畑のアラクを楽しませて鎮めるために行った牛の供犠のなかの、局面ごとの意味とともに感じられる「気分」を中心に記述する。

牛を屠る前の供犠柱を回り歩くゴング打奏の局面、屠りを経て肉を解体し調理する局面、それに続く宴席にゴングを吊るして座り込んで打奏する局面、再び回り歩く打奏の最終局面というそれぞれ異なる局面がある。ゴングのような楽器演奏については言うまでもないことだが、来場者への公平な分配のために肉を細かく叩き刻むような作業にも動作と音のリズミカルな感触がある。イベントの文脈を見渡すと、「牛」が屠られ「肉」になるという変化のもつ意味は大きい。肉の叩き刻みのリズミカルな響きは、ご馳走と宴会を期待する気分の充満に少なからず寄与している。そして宴会が

始まれば座に興をそえるかたちでゴング打奏が行われる。肉を「叩く」リズムとともに感じられた気分が後を引くかのように、ゴングを「叩く」楽しさをかたちづくっているように思われる。酔いも手伝って叩くリズムが顕著な多幸感を帯びている状態のまま、儀礼の締めくくりに再び供犠柱を回り歩いてゴング打奏を行う最終局面となる。タロームが打奏されるが、打奏者らは「タロームのブラハ（カミ）よ」と呼びかけられ、タロームのカミのための酒と肉を、彼ら打奏者が、その打奏の手を休めないまま飲食することになる。筆者はタロームのカミという存在を、その場で感じられているタロームの響き心地の対象化・実体化であると解釈するが、供犠の最終局面で重要なのは、この響きにともない共有される気分であると考察する。

第六章 気分と精霊—病癒しの事例から

病気の原因が霊的なものの災いであるとされることはきわめて一般的で、大小の規模の供犠とともに霊的存在との交信を司る者による病癒しの儀礼が日常的に行われている。本章ではある女性の病癒しの儀礼をとりあげ、その一部始終への筆者の参与経験において感じられた気分の運びに注目し記述する。祈禱句については内容を詳細に注解するとともに、韻律や語気の側面を、儀礼進行の起伏をつくる身体的な動きの流れに関連づける。霊的な災いに関係する建物や地面の隆起などを壊す儀礼的行為については、その物理的な動きの勢いの側面に注目する。これらから具体的に浮かび上がるのは、気分の運びが儀礼上重視されていることである。その理由に関連して、そもそも病気という事態が多分に気分の問題—当人や家族、さらにはかれらを包摂する共同体の気分の問題—であることを指摘する。当該事例では、女性の病の原因霊が「雨のしたたりのアラク」とされたことを挙げ、この霊にことよせて実際に感じられているのは、隠然と日常をとりまいている雨季の不快感であると推論する。原因霊の託宣と癒し儀礼は、その不快な気分を対象化したうえで、それを払いのけるような勢いとともに快活な気分を及ぼす営為となっている。そこから導かれるのは、気分が、生のコンディションの次元で根本的に価値づけられているという理解である。このことは、気分こそが人間の根本的な存在様態をかたちづくとするハイデガーの洞察を思い起こさせる。クルンにおける霊的なものの存在論は気分と密接に関係しているが、その関係を問うことは人の生に深くかかわるゆえに意味がある。

第七章 音響的経験としての憑依儀礼

ある程度深刻な病状に対応するとき、病癒しはしばしば憑依儀礼のかたちをとる。それは、人間に味方する種々の霊的存在を夜通しで霊媒師に憑依させ、それらの霊力の直接行使をもって災いをなす霊の影響を除こうとする営為である。憑依という身体的な変容プロセスに不可欠なのが、音響的な参与である。憑依の実現は、霊媒師の口から出る憑依霊ごとに異なる歌と、そのメロディをなぞるピー（シングルリードの竹笛）の伴奏に負う。さらにシェグルアラク（手持ちのゴブレット型太鼓）のリズムが、周囲を取り巻く人々の身体に響き伝わり、儀礼の場の参与の様態をより一体的にし、憑依霊のさまざまな行為を鼓舞するなど、憑依儀礼に独特の気分に寄与する。憑依中の霊媒の身体に顕著なのは、音響的表出とともに主に腕と手で表現される舞踊的な揺れである。ゴング打奏が必須とされる水牛供犠とともに憑依儀礼が併催される場合があるが、その際は回り歩くゴング打奏の輪に加わって憑依霊（霊媒）が踊るひとときが見られ、その揺れは、さらに大きく増幅され全身の動きになる。回り歩く輪の中央の供犠柱は、よくしなうようにされた弓なりに長い竹の工作物で飾られており、これが水牛および回り歩く者たちとの接触や風により大きく揺れる。ゴング打奏者にまじって憑依霊が踊るとき、場の全体が大きく揺れるような様子が際立つ。その揺れは、人と霊が一つの場に音響的に参与してともに楽しむ様態をほのめかす。さらに憑依儀礼のほかの局面として、病の原因霊から病人の「魂を取り返す」様子を描写する。悪霊との格闘を思わせる憑依霊の所作や、加速し力がこもる伴奏、会衆のさかんな手拍子と声掛けがあり、これら音響的参与は、霊的世界の現実感を強める特筆すべき気分をかもし出す。「揺れる」にせよ、「魂を取り返す」にせよ、人と霊のあいだには身体的な躍動がある。憑依儀礼では、独特の音響的な参与とそこに生じる気分が、霊的なものを

身体的に経験させ、身体的にそれを有意味に感じさせている。

結び 総括と今後の課題

本研究で目指した「ものを感じること」の民族誌は、身体でわかることを書くという一貫した姿勢で臨まれた。同じ場に居合わせ、間主観的に状況に臨んだ経験のなかで、筆者が身体的に感じたことを記述してきた。しかし、先方のクルンの人々にとっての現実にどこまで迫れるかという目標に対して、多くは今後の課題として残された。最終的に記述者の日本語の思考回路でしか書けないということが、文化的差異をまたいでの間主観的な理解の困難な挑戦の根底にある。ローカルの「直接話法」を提示することに匹敵するような、ローカルの身体的経験の提示をめざして、とりうる手立てをさらに柔軟に、さらに深く探っていく必要がある。

審査結果の要旨

<論文審査>

審査の方法

平成 29 年 2 月 16 日、新研究棟共同講義室 1 において、15:00 から 16:00 まで公開発表会を開催し、学位申請者による学位請求論文の要旨に関する口頭発表および質疑応答がおこなわれた。その後、16:05 から 17:55 まで、新研究棟共同ゼミ室において、審査委員全員により学位請求論文の審査およびその関連分野に関する口述試験をおこない、申請者退席ののち、審議のうえ合否が判定された。

審査の内容

本論文は、北東カンボジア山地において焼畑農耕を生業とするクルンの人びとの音響的生活に関する民族誌的研究の成果であり、そのもととなった現地フィールドワークは、2010 年から 2016 年にかけて、合計約 2 年 4 ヶ月にわたって実施されている。本論文の主な目的は、クルンの人びとのさまざまな音響的経験の根底にある「気分」や「感触」を描き出すことにあり、その主たる方法は、音響事象へのクルンの「参与の様態」（関わりかたや気分の帯びかた）について、申請者（すなわち民族誌記述をおこなう者）自身の感じかたとクルンの人びとの感じかたの「あいだ」を重視し、両者の音響的経験にたいして間主観的・間身体的にアプローチするものである。

第一章「視座と射程」ではまず、調査初期において、申請者がゴング打奏と打ち上げの宴会に「参与」することをつうじて感じとられた「気分」という概念が提示される。次に、音響人類学の先行研究の吟味をとおして、音響的経験の「様態」（ありかた）やそこにおける身体性を間主観的に探究する民族誌的研究という、本論文がとる基本的な立場と方向性が示される。

第二章「生活環境と霊的なもの」では、クルンの人びとが暮らすカンボジア北東部に関して、歴史的・言語学的・地政学的に概観したのち、クルンの民族的出自、言語、1960 年代以降の歴史、生活環境、社会生活のありかたなどが記述される。ちなみに現地調査は、ラタナキリ州カンチューン村一帯で実施されており、同州に居住するクルンの人口は約 22,000 人、同村落の人口は約 300 人である。クルンの人びとは、大きく分けて 4 種類の霊的存在——「アラク」（アニミズム的な精霊）、「ブラハ」（いわゆるカミ的な存在）、「カヨック」（死霊）、「ブユー」（生き霊の一種）——を分類・認識しているが、本章では二人のクルンが語った霊的存在との遭遇談が逐語訳によって提示される。申請者は、これら二つの語りのいずれにおいても、霊的存在の出現が擬音語で表現されていることに着目し、廣松渉の「表情論」を援用しながら、それらの擬音語表現が「身体的経験をとおして共振的に感得された表情だ」と述べる。

第三章「参与の問題系」では、病気の治癒や災厄の沈静化を祈願して、霊的存在に動物（水牛、牛、豚、鶏）を捧げ、霊をなだめる供儀におけるゴング打奏（こぶ付きゴング 5 台の合奏）の概略が記述されたあと、「参与」の問題とそれに関連する諸問題が論じられる。「参与」は、英語の“participation”から発想された概念であり、「参加すること」「分かちあうこと」「様子や調子を帯びること」といった意味を内包している。申請者は、これらのうち「様子や調子を帯びる」という様態に関する側面に注目し、それを「参与の様態」と呼ぶ。「参与の様態」はさらに、主体と主体、あるいは身体と身体の「あいだ」の問題、事物の様態や身体的な様態をあるまとまりをもつものとして感じとる「感触」の問題、そして人と人とがたがいに帯びあい、共振しあう「共調」の問題へとつながっていく。

第四章「ゴング打奏の感触」は、申請者自身がこぶ付きゴングを実際に打奏した経験に関する微視的・内省的・現象学的な記述ではじまる。クルンによると、ゴングの響きは「ニユム」（甘く美味）でなければならない。「ニユム」であるためには、自分の身体とゴングとが「共調」し、かつ

自分のゴングの響きと他の奏者たちのゴングの響きとが「共調」しなければならない。この後者の関係性は特に、音響的な「あいだ」の問題として、また「間身体的な共調」の問題としてクローズアップされる。すなわち、演奏者たちが生み出す響きの「あいだ」、そして演奏者たちの身体の「あいだ」には、ある共調関係が存在し、その共調関係は、実在的で身体的な「感触」として——「ニユム」や「ロク」（楽しさ、すがすがしさ）として——感知されると論じる。

第五章「供儀のゴングと気分」では、畑の精霊をなだめるために2日間にわたって実施された牛の供儀の背景と全プロセス——精霊を怒らせた理由、供儀の開始、病気で亡くした幼子と殺される牛に向けられた泣き語り、牛の周囲を歩き回りながらおこなうゴング打奏、牛の屠殺と解体、肉を叩き刻む音、米の醸造酒や焼酎による酩酊状態、木の梁から紐で吊されたゴングの打奏、精霊への祈祷、ふたたび歩き回りながらのゴング打奏、奏者たちの口に肉と酒を入れること、そして供儀の終了——が詳細に記述される。この記述において強調されているのは、場面ごとの「気分」の変化である。すなわち、ゴングをともに打奏する人びとは、ある共通の「気分」を帯びており、牛が動物から肉へと変化する前後では、場の「気分」が明らかに異なる。あるいは、酒に酔うことで、ゴングを打奏することが楽しくて仕方がないという「気分」が醸成され、供儀を無事に執りおこなうことで、精霊をめぐる高揚した「気分」は、いったん鎮められる。

第六章「気分と精霊」では、病癒しの儀礼が取り上げられる。クルンのあいだで病気は、何らかの理由で恨みをいだいた霊的存在によって引き起こされると考えられており、病癒しの儀礼は、霊媒師がその原因となった出来事を突きとめて、病気を治療することが主眼となる。儀礼においてはまず、霊媒師がみずから精霊を憑依させ、病気の原因が託宣される。そして独特な語り口で祈祷がおこなわれ、病人の親族によって豚と鶏が殺され、供物として精霊に捧げられる。その後、病気の原因と特定されたさまざまな出来事が、決められた手順に従って処理され、病癒しの儀礼は終わる。今回の病気の原因となった事柄の一つは、病人の住む母屋からしたたり落ちる雨だれが、軒下にある木の切り株の精霊を怒らせたことにあった。そのため切り株は掘り起こされ、他の場所に移されたのだが、申請者はその背景に、村人たちが共通して雨や雨季を不快に思う「気分」が働いていると見る。すなわち、人と環境の「あいだ」にある「気分」こそが、精霊という存在自体と精霊が雨だれを嫌がる「気分」を生みだしているのではないかと推論する。

第七章「音響的経験としての憑依儀礼」では、大がかりな水牛の供儀とともにおこなわれた霊媒師による病気治療のための憑依儀礼が、音響的プロセスを特に強調しながら記述される。霊媒師への精霊の憑依は、シングルリードの竹笛とゴブレット型の片面太鼓の音によって導かれるが、霊媒が小声で歌い始めることが、精霊の憑依のしるしと考えられている。憑依する霊はそれぞれ固有の歌をもっており、どの歌がうたわれるかによって、憑依霊の身元が確認される。ひと晩の憑依儀礼において数十種類の精霊が入れ替わり立ち替わり憑依し、霊媒の口をとおして、病気の原因や治療の方法などをそれぞれ独特の口調で託宣する。憑依儀礼の場には、霊媒師の託宣する声をはじめ、竹笛や太鼓の音、供儀で用いられているゴングの音、周囲の人びとのざわめく声など、じつに雑多な音が音響的に「参与」し、そのなかで霊媒師は座ったまま、腕と手、上半身を柔らかくしならせるように揺らしながら託宣をおこなう。その揺れには人と精霊がともに「参与」し、霊媒師＝精霊の身体が「共調」し、そこに「住みこむ」ようにして揺れを増幅させる。そうやって現れ出てくる「気分」や「感触」をとおして、人びとは音響的かつ霊的な力を帯びると結論づける。

本論文に関して、次のような点を高く評価することができる。(1) 現地フィールドワークの遂行自体が困難な環境のもと、忍耐強い長期調査をとおしてクルン語を習得し、それによって得た貴重な民族誌的データ（特に牛の供儀および霊媒師による憑依儀礼に関する音響的・民族誌的記述）を提供している。(2) 音響事象にたいする人びとの「参与の様態」記述をとおして、かれらの音響的経験の根底にある「気分」や「感触」を描きだそうとする試みは、民族音楽学や音響人類学の領域において、従来企てられたことのない画期的なものであり、「あいだ」や「共調」といった独特の分析概念とあいまって、本論文の際立った独自性と先端性をあらわしている。

以上を総合的に判断したうえで、審査委員全員一致で、本論文が博士（音楽学）の学位論文として相応しいものであると判定するとともに、口述試験を合格とした。